掛け軸に見られる子ども絵の考察

蛭　田　道　春

はじめに

江戸時代のこどもは、士農工商という身分制度のもとにおかれ、その中で子どもは大人に成長していった。それぞれの身分にあった教育機関が設けられ、年中行事、あそび、集団などの生活に照応した教育システムが存在していた。また、教育書、しつけ書、子ども向けの絵本などが刊行されていた。こうした教育文化によって日本の子ども文化が誕生した。例えば、武士は、太平の時代の支配者として「文武兼備文武両道」の保持、厳しい心身鍛練の教育がなされていた。町人は町人道として、利徳、算用の巧みさ、諸芸、年季奉公などが存在した。

教育機関においても、武士のものとして昌平坂学問所、藩学校、郷学校などが、庶民には寺子屋などが発達した。また、武士階級には青少年の頃より城下町を中心に武士の子ども集団が組織化されていた（薩摩藩の郷中の制、会津藩の什人組など）[1)]。

庶民には地域共同体をベースに子ども組、若者組が組織化されていた。そして多くのしつけ書、教育書が刊行されている。例えば、貝原益軒「和俗童子訓」（1710 年）、中江藤樹「翁問答」（1641 年）、中村惕斎「比売鑑」（1661 年）、香月牛山「小児必要養育草」（1703 年）などである。また、こどもをめぐる様々な遊び、遊具、こどもの読み物などがみられることからもうかがえる [2)]。

武士、庶民ともに共同体としての意識や行動を成員に身に付けさせるための教化は、家庭や地域共同体のなかでの生活のあらゆる機会を通じてなされた。

まず、子どもが生まれると出産祝、七夜の祝い、食い初め、節句、七五三の祝い等、地域共同体の成員の一人として認められるという意味での行事があった。子どもは成長するとともに家の中での遊びを通して集団の一員としてしつけられ、戸外の仲間と遊ぶようになると仲間集団の中で、仲間とのつきあい、協力・協調性等を学んだ。子どもの遊びには、草花つみ、どんぐり拾い、かえるつり、雪遊びなどのように、自然界の仕組み、自然現象、自然の名称などの知識を習得したり、自然に対する態度を学んだりする機会でもあった。

また、江戸時代には、家制度に依拠していることから将来の家を支える子どもが大事にされた。しかし、すべてのこどもがめぐまれていたのではない。貧しい生活苦から間引き、子殺しがなされていたし、医療がまだ未発達なことから子どもの健康が阻害され死にいたる子どもも多かった。そこには、子どもの健康・安全を祈ることしかなかったので、邪気を祓う疱瘡絵などのように、神・仏への願いしか存在していなかったのである [3)]。

子どもの遊びを考察するにあたって、わが国の近代以降の社会教育が伝統的教育を温存して発展しているとすると、その前史としての江戸期の子どもの状況を考察しておくことは、重要なことである。江戸期の子どもの遊びを研究しているものには、先行研究として、錦絵の子ども絵を中心として取り上げたものや、子どもの読み物（絵本、遊具など）、などを究明してきた労作がある [4)]。しかし、掛け軸に描かれたものを中心に考察された研究はすくないと考える。掛け軸は周知のように家庭で季節ごとに掛けられた、いつも日常生活の中でいわば教育性のある視聴覚教材であった。そこには、子どもの生活に関わる内容や方法が示されている。

本研究では、これらの多くの掛け軸うちから、そこに示されている多様なタイプの子どもの生活をピックアップし、その特質を考察しようとするものである。

1．子ども絵考

子どもを対象にした絵には多様なものが見られる。

縄文時代には、子どもが健やかに育ってほしいとの願いからか子どもの手形、足形などがみられる。中世からは、両親が亡くなった最愛の子どもの肖像（あり日の姿）をとどめることがなされている。そして、孝養太子像、稚児大師像などのように子どもを神・仏に

近い存在としてとらえている場合もある。その他に、神、仏の世界で童子といわれる尊像が見られる。（美術の中のこどもたち　東京国立博物館　平成13年）

近世になると、子ども絵は多くなる。つまり、将来の大人になる子どもへの期待、健やかに育って欲しいというが芽生えたからであろう。錦絵、往来物、掛け軸などに多く見られる。また、育児書の和本も多く刊行され、その中に子ども絵が描かれている。

江戸中期ころからは、往来物、錦絵、掛け軸などに子どもの姿を描いた作品がみうけられる。その子ども絵の多様な種類として、例えば、歴史上の人物についての子どもを描いたもの、節句や祭り・正月など年中行事にかかわる子どものをえがいたもの、美人と子どもを描いたもの、子どもの遊びそのものをえがいたもの、寺子屋・お稽古ごとなどをえがいたものなどである。掛け軸の子ども絵は非常にすくなく、むしろ江戸末期に錦絵などに多くの子ども絵が多いようである。錦絵には、多様な遊び、唐子の図、年中行事の図、寺子屋の図、美人と子どもなど、その数は多い。掛け軸には、子どもの肖像、美人と子ども、四季の変化を描いたものなどである。

２．和書にみられる子どもの遊び、祈り

近世の限られた資料のなかで、和書に描かれている子どもの遊び、健康・祈りをめぐって紹介してみる。

（１）遊び

江戸中初期には、子どもの存在が訓蒙図彙にとりあげられているように、その存在が認められたと考えられる。

・「訓蒙図彙　寛文16年」には、嬰、童、牧童などの子どもに関して次のように解説されていて、此の頃になった子どものことが取り上げられたと考えられる。

嬰－みどりこ　児－ちご　同嬰児－孩児也　赤子あかご

童－わらべ　未冠也　略

牧童－うしかひ

・「頭書増補訓蒙図彙　元禄８年」にも子どもに関することが次の様に説明され、訓蒙図彙よりも一歩すすんで説明されている。

「嬰は、人始てひまなくを嬰児と云、胸の前を嬰といふこれを嬰本にかかえて乳養す　故に嬰といふ又女を嬰と云男を児と云……」

「童は男15以下を童子といふ　童は獨なり言……」

「牧童　うしかい……」

そして、こどもの遊び道具をつくる次の様な職人があるように、子どもの遊びの種類が多くなっていることを語っているといえよう。

・「人倫訓蒙図彙」[5]（元禄３年）

持遊細物屋

童子のもてあそび物一切、此所にあり。諸方の細工人おもひ……のあみたてをつくりて、此家に持来る。但、紙、薄板等をもつて造る雑品の物なり。五条橋の西、此棚あり。

羽子板屋

童男・童女のもてあそび、玉ぶりぶり、ぎっちやう、たいこ、はごいた、つくりばな、しやうぶがたな、かいらぎ、此所にてこしらゆる。かぶと、とうろ、ひつほつかい、此品々、新町こひの棚に、五せつくのいわゐ物をあきなふ。

小児医師

産前産後等いずれも一家の別伝あり。諸医の中にむつかしき第一とす。言語かなはざれば、陰陽をわかち、青黄赤白黒の五つをかんがへ、薬を用の口伝あることなり。

雛師

紙ひいな、装束ひいなあり。紙ひいなは、紙をもて頭を造る。又、ほうこのかしら、これをつくりて、ひいなやにうる也。雛屋これをもて品々仕立あくなふ也。

次に、具体的に遊びをあげてみよう。

一般的にわがくにの子どもの遊びには、年中行事型、自然とのふれあい型、集団（仲間遊び型）、道具活用型などがあげられる[6]。

年中行事型は、正月、初午、桃・端午の節句、祭り、七夕、十五夜などである。

日本と西欧との違いは、日本では、西欧と比較して季節感が明確で春夏秋冬の季節が自ずと日本人の意識に季節意識をもたらしている。稲作を主要とした国では、人々の生活が季節に直轄していたので、年中行事がおこなわれるようになった。

例えば、地方によって異なるが、１月　正月　２月　初午　３月　桃の節句　４月　花まつり　５月　端午の節句　７月　七夕　８月　お盆　９月

菊見　10月　月見
11月　えびす講　12月　お酉さま　などがあげられる。

自然とのふれあい型には、つり、魚とり、せみとり、お花摘み、蛍狩りなどが、集団遊びは、鬼ごっこ、戦ごっこ、子をとろ子とろ、そして、道具活用型には、のぞきからくり、仕掛け絵、かるた、羽根突き、すごろく、めんこ、投扇興などがある。

このようなタイプのうちで、江戸前・中期には、どのような子どもの遊びがあったのか下記の資料から考えてみる。

・西川祐信「絵本大和童」[7]
夏祭り、雪遊び、凧あげ、魚取り、とんぼつり、琴の稽古、端午の節句など

・西川祐信「絵本東わらべ」[8]（子どもの遊び－江戸時代の絵本に見る　肥田晧三）
草履かくし、とんぼつり、ままごと、面あそび、子どもあやつり、花見見物、魚つり、縄の船、将棋、寺入り、硯洗い、貝勝負、蜂の巣とりなど

・小児必要養育草（香月牛山）元禄16年　1703年[9]
和俗、児子に破魔弓・羽子・紙鳶・竹馬・殿事・炊事の戯れをなさしむるの説

・幼児輔佐の心得（稲葉迂斎）元文元年[10]
……いま小児の、破魔弓を射、人形をならべ狛をまわし、春風に紙鳶をあぐる如き、成人の後かならずややむ事なれば、後の害なし。……

・画本弄　下河辺拾水　安永9年
潅仏会（花祭り）閻魔大王　月がみている（泥棒に対して）　寺子屋での遊び
など

江戸中期には、どんな子どもの遊びが存在したかが理解できたが、幕末にはさらに子どものあそびは増えている。

幕末の遊びについて、「古今吾妻余波」（岡本昆石編纂　森戸錫太郎出版　明治18年10月）には、「男児の遊戯」「児女の遊戯」「男女の遊戯」としてあげられている。次にそれらを示してみる。

男児の遊戯
紙鳶あげ、独楽まわし、鞠受け、竹馬、雪転がし、お山の大将、雪ぶつけ、輪ころがし、座り相撲、根っ木、沢庵おし、針打ち、銀杏うち、泳ぎ、押ツ競、太鼓、木登り、菖蒲たたき、ブランコ、春駒、釜鬼、面地打ち、ちょん隠れ、杉ぶつけ、頸引、縄こぐり、お亀じょんじょろ巻、甲螺、蝉捕り、蜻蛉捕り、道中駕籠、駈ツ競、魚しゃくひ、お馬、蝙蝠捕り、上り下り、

児女の遊戯
手毬つき、お手玉、羽子つき、姉さんごっこ、雛遊び、ままごと、竹がえし、細螺弾き、向うのおばさん、綾とり、お山のお山のおこんさん、細螺おしゃくひ、一つ二たつ、縁結び、てんてつとん、つばなつばな、

男女の遊戯
骨た（カルタ）、鳥刺し、源氏合わせ、折は十六むさし、にんじん牛房、目隠し、釣り狐、墨転し、道中双六、籠目かごめ、淀の川瀬の水車、火廻り、廻りの廻りの子仏、爺さん婆さん毛エ唐人、廻りつ競、お茶坊主、福引、子を取ろことろ、隠ん坊、銭山金山、鬼ごっこ、どうどう旋り、此所は何所の細道じゃ、お尻の用心、竹の子、蓮華の花、下駄隠し、芥隠し、ちんちんもぐもぐ、芋虫ころころ、目んめ盲目、髪ひき、ずいずいずっころばし、鼬ごっこ、白眼っ競、草履近所、軍師拳、お亀のかおつけ、折方、松葉っ切、そうめん、兎うさぎ、千手観音、陰絵、玉や吹き、どんどん橋、肩車、猫や猫や、塩や紙や、陰や唐禄人、百物語、じゃん拳、耳っ遠、上り目下り目、手芸、蛍狩、謎掛け、祖父祖母の噺、かや釣り

（3）祈り・信仰

子どもの安全・健康を保持するには科学的知識・技術がなかった時代には、神・仏に祈るしかなかった。その祈り・信仰には子どもの生活に密着しており、地域の年中行事、家庭での神事・仏事がその機会であった。

子どもをめぐる祈り・信仰には、いくつかの種類が考えられる。

その一つは、子どもだけが祈り・信仰するものとして、寺子屋の天神講神事、左義長などである。

二つには、地域共同体の仏事や神事にこどもが参加するもので、家庭の年忌仏事、地域共同体の様々な行事やまつりなどである。

三つには、保護者が子どものためにする祈りで宮参り、七五三、地蔵信仰、腹帯などである。

ここでは、それらのうちで天神信仰、地蔵信仰、鬼子母神信仰、栴檀乾乾闥婆などをあげてみる。

天神信仰は、菅原道真の学徳が伝説となって学問の

神として信仰されるようになった。寺子屋では、天神講として菅公の掛け軸や像を祀った前で、食事をしたり、書の上達と学業の成就を祈ったものである。

地蔵信仰は、地蔵菩薩が地獄から救済してくれるということから子どもの安寧と生命を守るという信仰を展開した。子どもの健康・生命が、おびやかされる時代に地蔵にすがるということが生まれたのである。それは賽の河原和讃に示されているとおりである。

鬼子母神は、「求児・安産・育児などの祈願を叶える」という。(広辞苑)そのため鬼子母神信仰がみうけられる。

近世になると、「養生」という考えが普及する。例えば貝原益軒は、「養生論」をあらわしているように、食事、生活習慣を重視している。

また、当時は、子供は、健康に侵されたり、病気(疱瘡、麻疹など）にかかりやすかったので、疱瘡、麻疹を防ぐことから朱画の「疱瘡絵」、「麻疹絵」が多数、出されている。その絵の内容は、、ダルマ、鎮西八郎為朝、桃太郎、など多彩である。これらの錦絵を貼っておくことしか出来なかったのである。

封建時代のこどもは、「子宝」としてそだてられていたわけではない。天災、年貢等に遭遇し、厳しい生活をしいられていた。庶民は子供の労働を必要としたともに、こそだてをする余裕がないために間引きがおこなあわれていた。

3．掛け軸に見られる子ども

この章では江戸前・中期に描かれた子どもに関わる唐子図、浮絵、などから実際の掛け軸を紹介してみよう。

江戸前期の子ども絵については、掛け軸は、狩野派によって描かれた唐子が多くみうけられる。唐子は布袋とのかかわりが次の資料のようにあることから子ども絵には多く描かれていえる。また、子孫繁栄という願いのためであるといわれている。絵本などの子ども絵は、1700年時代からであると、初期は唐子が主流であろうか？　唐子図は、「子孫繁栄」を願う意味があった。例えば狩野探幽筆の布袋唐子遊図（富山県　善得寺蔵）　にみられる。この唐子に関する作品は、もっぱら狩野派によって受け継がれていたと考えられる。そして、布袋と子どもの関係は、次の資料から由来しているといわれている。

「布袋和尚の事納所

常に童べ子供と遊び戯れられし、金山寺の納所を頼受合れ、寺の事は何も不構、猶童共とおつばさつと云ておられ候、是にて納所も不相済とて免じ候へば、仔細なく寺を出、童どもと遊び戯れ居所出所もなきよし、……[11]」

①布袋唐子図　狩野永納筆（1631 － 1697）　絹本彩色　38.4 × 83.9㎝　江戸初期

風車をもつ子ども、鬼ごっこ、犬をあしらっている子ども、馬乗りのこども、弟をおんぶしている子ども、人形をもつ子ども、布袋とあそぶ子ども

作品には、子閏12月[12]と書かれており推定すると1694年であると考える。

作品の内容には、犬がえがかれており、五代将軍徳川綱吉の生類憐令を想定したものであろう。この永納の作品は、幾何学的、三角形的、水平的である。

②唐子百図　津田朴由筆　絹本彩色[13]　93.6 × 43.5㎝　江戸中期

鶏闘、こをとろこをとろ、水あそびのこども、つりをしている子ども、でんでん太鼓を持つ子ども、手習い（本を読む子ども)、人形をもっている子どもなど

津田朴由の作品は、100人の唐子を描き、健康、幸福の願いをあらわしたものである。

100福といい、遊びの内容として、鶏闘、こをとろこをとろ、など当時の子供のあそびを唐子に模したと考えられる。作品は楼閣的な書法である。

このように（①②）江戸初期には、唐流が重視されていたが、次の西川祐信が述べているように、次の資料のような批判が存在した。このことがきっかけで日本の子ども絵が生まれていく機会になっていくのであったと考えられる。日本独自の子ども絵が出現する機会になったのではないだろうか？

「其図する所、皆聖賢又は詩人仙客のたぐひのみにして、本朝の人物は稀なり、たまたま神像などを画といへども、皆唐流を用ひ、さながら唐土天竺の人倫のごとし、筆法又唐に着して和人に応ぜず、故に敵々和人形を書るも、唐あきて精神こもらず、是偏なるに非ずや、此故に其得たる所に本付て、和流をいやしめ、図形をなすにも、唐山水、唐耕作、唐子遊びなど、皆唐に帰して本朝を捨、是遠く他の国を信じて、近きわが国をいやしむるの心ならずや、……」

洛陽大和画師文華堂西川祐信識[14]

③倭童子図屏風　無落款　紙本彩色　35.4 × 131.1㎝（左右同じ）　江戸中期

この屏風は享保期の雛様の背景のものであるらしい。唐子を扱っているが、遊びとして、鶏闘、こをとろこをとろ、ケンカ、を描いていて、わが国にある遊びを模していると考えられる。

④浮絵（守昭画）[15]　紙本彩色　60.2 × 86.7㎝　江戸中期

広苑によると浮絵とは「遠近法を応用し、実景が浮き出して見えるように描いた絵」とある。この浮絵には、大名時計と子ども、節分の鬼、猫を抱いている子ども、豆を拾っている子どもが描かれている。

⑤四季遊童図巻　無落款　29.3 × 602.4㎝　江戸中期

四季おりおりの遊びの例を描いたものである。

春　闘鶏　　平安時代よりあるが、近世に入って民間でも行われるようになった。３月３日に行われたようである。

夏　烏賊のぼり（たこあげ）　正月が多いが、関西では７．８月におこなったという。

子とろ子とろ　平安時代には「比丘女」といわれ、地蔵菩薩が、罪人を「地獄の獄卒」から守ろうとする話に由来する。子ども一人が鬼となり、子どもの行列になっている最後の子どもをとらえる遊び。他の子どもは、お互いに子どもの腰の帯をつかんでたてながの行列の先頭のこどもが、最後尾のこどもをかばうあそび。

秋　秋の草花をあつめて花輪をつくっている。子どもが魚釣りをしたり、魚を竹串をしてるように魚とりをしている。

冬　正月　雪だるまころがし　子ども獅子

子どもの一人前になるまでの成長は、この年中行事の自然と深く関わっていたと考えられ子どもの感性を完成した。

⑥竹馬と犬遊び　無落款　紙本着色　67.5 × 23.5㎝　江戸初期

鎌倉時代頃に、「葉附の生竹を馬とし、これに手綱をつけて跨るもので」（酒井欣著　日本遊戯史）あったという。その後、元禄以降に「木彫の馬首に漆をもって塗り、鬣をつけ……」、手綱をつけたものであった。文化文政期になり現在でも使用されている竹馬になった。本掛け軸は、竹馬の源流を示したものとして非常に貴重な資料である。

⑦小出吉政兄弟肖像　無落款　39.1 × 53.3㎝　江戸初期

小出吉政の弟秀家が関が原出陣の時である。（小出家　出石６万石）

小出家の長男を跡取りとして認めるところか？　また、吉政の長男に対する慈愛が認められる。

⑧乾闥婆明王　無落款　絹本彩色　82.8 × 32.7㎝　江戸中期

乾闥婆は、「胎児・小児を守護し悪魔を払う神」としてとらえられている。（国史大事典）

同様に「密教では、乾闥婆は神王と称せられ、胎児および小児の守護神」とされている。

そしてこの神王を本尊としての修法は、童子教法あるいは乾闥婆法とされている。

つまり童子教法とは、「護法童子教陀羅尼経」により、「幼児の疾病を除去する神」であるともいわれている。

⑨鍾馗朱書　石田友汀筆[16]　紙本墨画　124.8 × 28.8㎝

疱瘡よけの朱画については、次の資料からも当時朱画が信じられていたことがわかる。

○朱鍾馗

……写し取りて今日の画談とす、光起云く、疱瘡よけの鍾馗画き様は、世間に辰砂にて画く者あり、是は了簡違ひなり、紅を以て可画、紅花は本草に曰く、能悪邪熱去、疱瘡日に入るに、燕脂眼に入る時は邪熱去、依之多く疱瘡に用ふ、紅を以て画く習ひ有り、紅花計りにては除くる事弱し、雄黄を水に入れ、其水にて紅を解て画く事秘伝也……（屋代弘賢著　輪翁画譚[17]）

⑩地獄図　無落款　紙本彩色　135.7 × 41㎝　江戸後期

地獄は六道輪廻の一部である。この地獄図にはいろいろな恐ろしい図が描かれている。もし人が現世で悪事をすれば、この地獄に堕ちるものであるといわれている。当時の人々は、これらの地獄図から現世の善悪を教化されていた。

閻魔大王を中心に書かれている。子殺しをしたかのどうかのはかりをかけている。

舌を抜く図、鉞で手足を切断する図、火あぶりの図、岩の間にはさみこく図、ご飯に火が出て食べられない図、手にくぎを打ち付ける図、釜湯の地獄の図、蛇女の図など恐ろしい地獄図である。

また、間引きしたこどもが昇天しているのがみられる。

まとめ

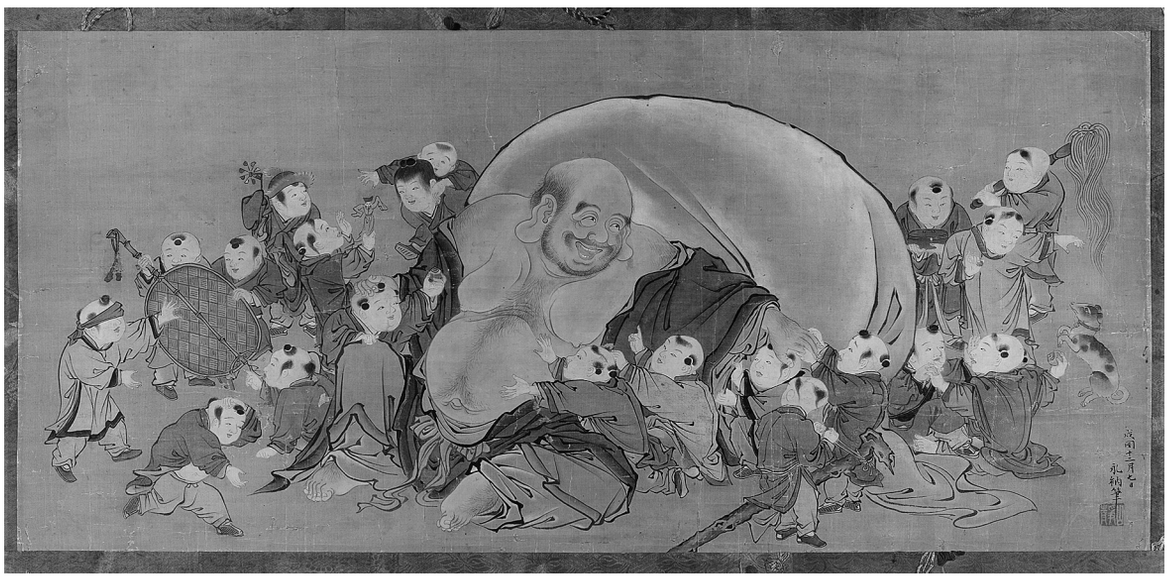
江戸前期の子どもに関わる絵を紹介してきたが、次のことが考察される。

・唐子の遊びに我国の遊びが考察される。こをとろこをとろ、あやつり人形、など
・錦絵にはみられなかった子どもの生活が考察された。
・その意味で今までにわからなかった子どもの生活の一面を知ることができた。

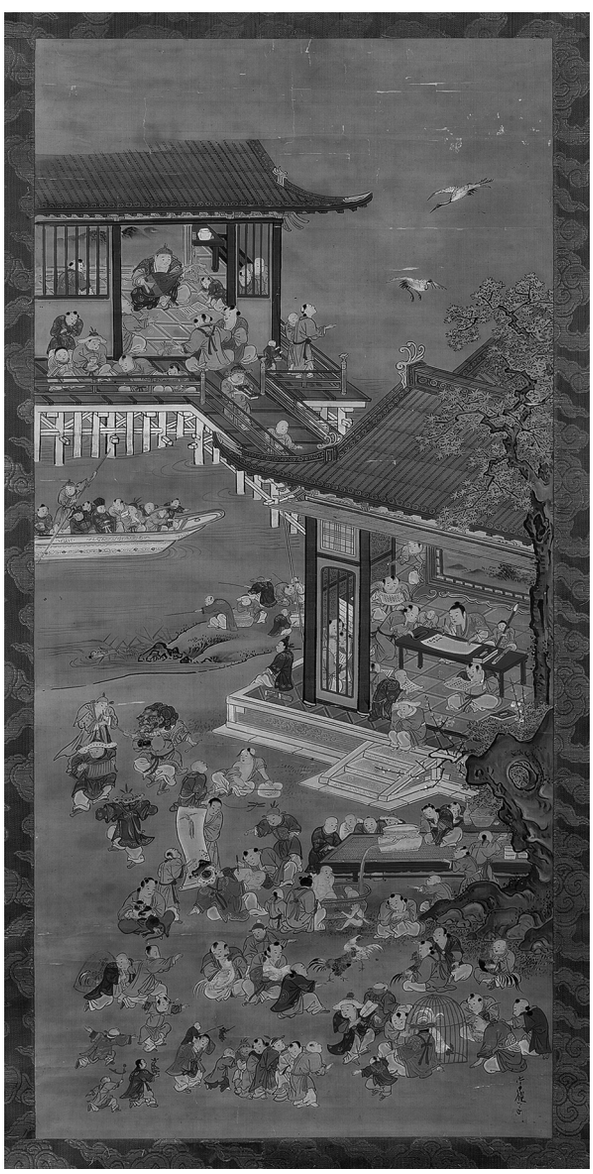
掛け軸にみられることが、その時代の子どもの生活を物語ってるとはいえない。しかし、子どもに関する資料が見出せないことを考慮すると、その時代の掛け軸に描かれた絵は、床の間に展示されたものである以上、その生活観の一端がみてとれると考えてよいであろう。

註

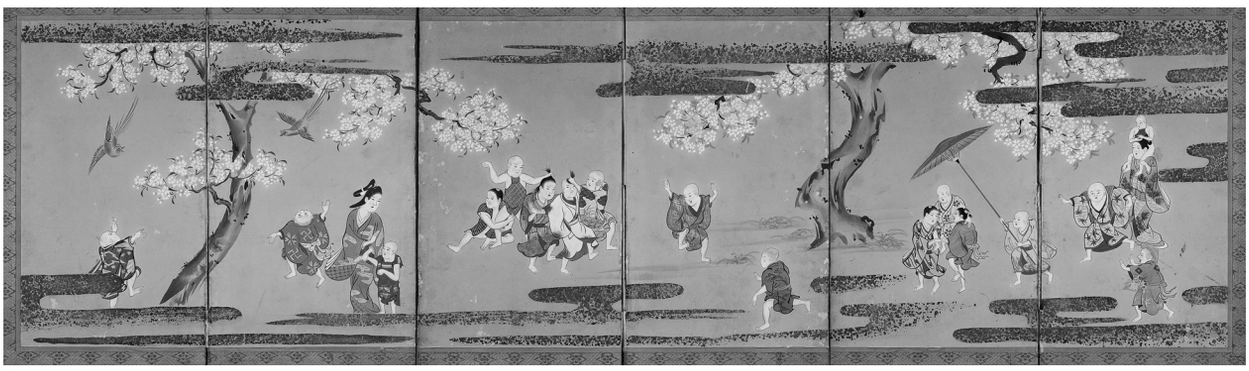
1）唐澤富太郎著「明治百年の児童史」講談社　昭和43年　同者著「日本教育史」誠文堂新光社　昭和53年
2）「子育ての書1」　東洋文庫285　山住正巳編注者　昭和51. 2
3）ハルトムート・オ・ローテルムンド著「疱瘡神」岩波書店　1995年3月
4）くもん子ども研究所編著「浮世絵に見る江戸の子どもたち」　小学館　2001年4月初版第2刷
5）「人倫訓蒙図彙」　東洋文庫519　朝倉文彦校注者　平凡社　1994. 8　初版第2刷
6）唐澤富太郎著「明治百年の児童史」講談社　昭和43年
7）西川祐信著「絵本大和童」(鈴木重三編集　復刻「近世日本風俗本集成」昭和50年3月　臨川書店
8）日本の子どもの本歴史展図録　社団法人　日本国際児童図書評議会　財団法人　東京都文化振興会　1986. 8.15
9）2）に同じ
10）2）に同じ
11）日本書画苑第二　国書刊行会編　昭和45年2月　名著刊行会
12）日本暦日原典　内田正男編著　雄山閣出版　昭和50. 7
13）津田朴由　名は常燿、抱素斎と号す。江戸に住す、書法を狩野常信に学ぶ。正徳頃の人なるべし。(日本書画辞典　人名編　思文閣出版)
狩野常信　1636－1713　寛永13－正徳3
別冊　太陽131号　平凡社　狩野派決定版　狩野派系図　山下善也編
14）日本書画苑第二　国書刊行会編　昭和45年2月　名著刊行会
15）江戸の遠近法－浮絵の視覚―　岸文和著　勁草書房　2004. 4
16）石田友汀（1756－1815）円山応挙の師匠　石田幽汀の長男
17）日本書画苑第二　国書刊行会編　昭和45年2月　名著刊行会



①布袋唐子図　狩野永納筆

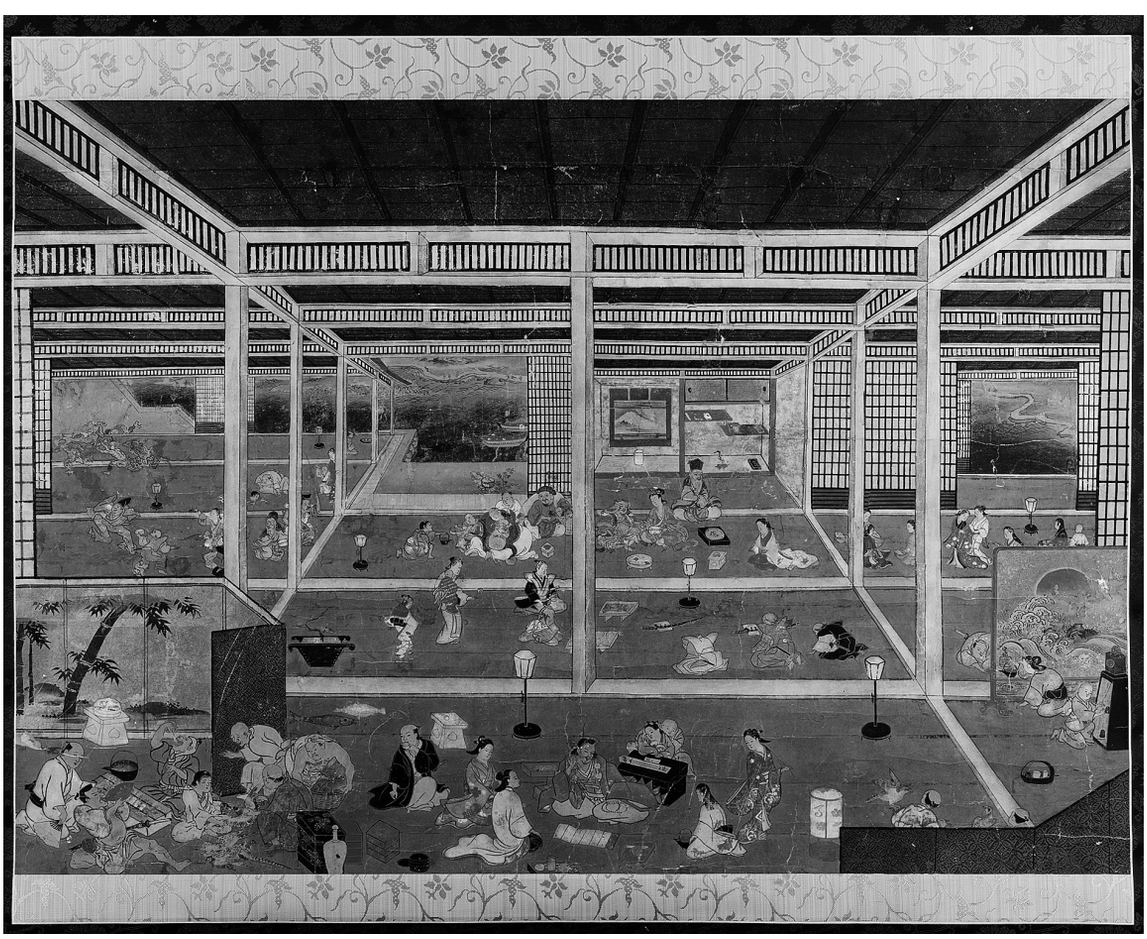


②唐子百図　津田朴由筆



③倭童子図屏風（無落款）右双

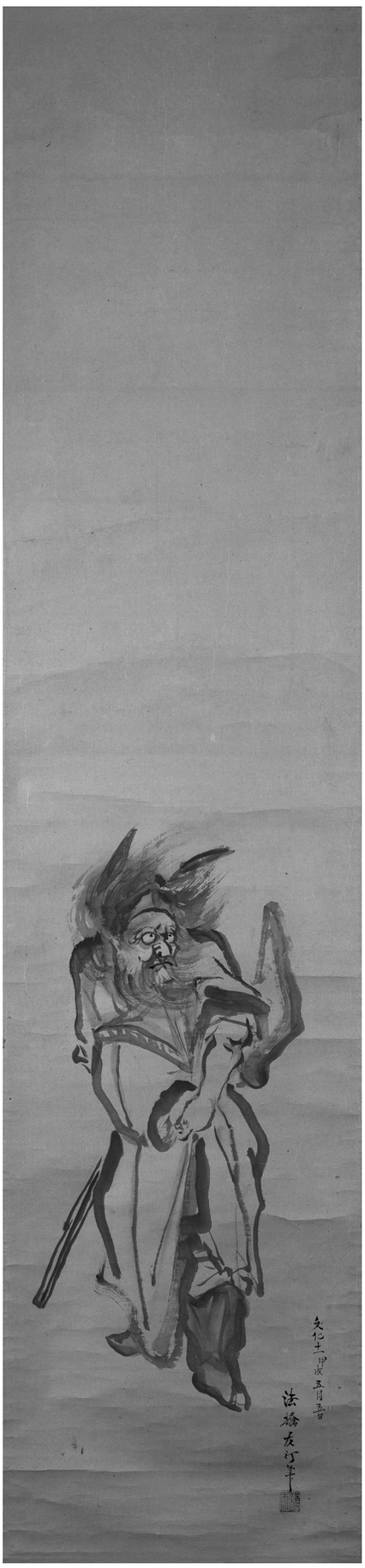
③倭童子図屏風（無落款）左双



④浮絵

⑤四季遊童図（無落款）

⑥竹馬と犬遊び（無落款）



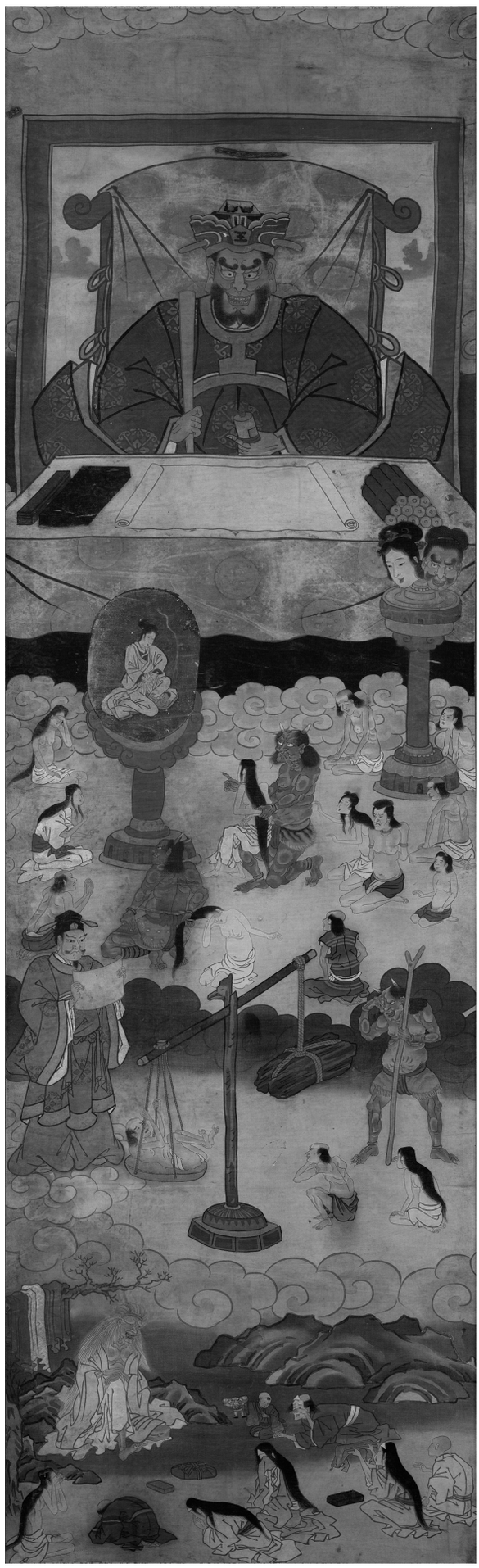
⑨鐘馗朱書　石田友汀筆

⑦小出吉政兄弟肖像（無落款）

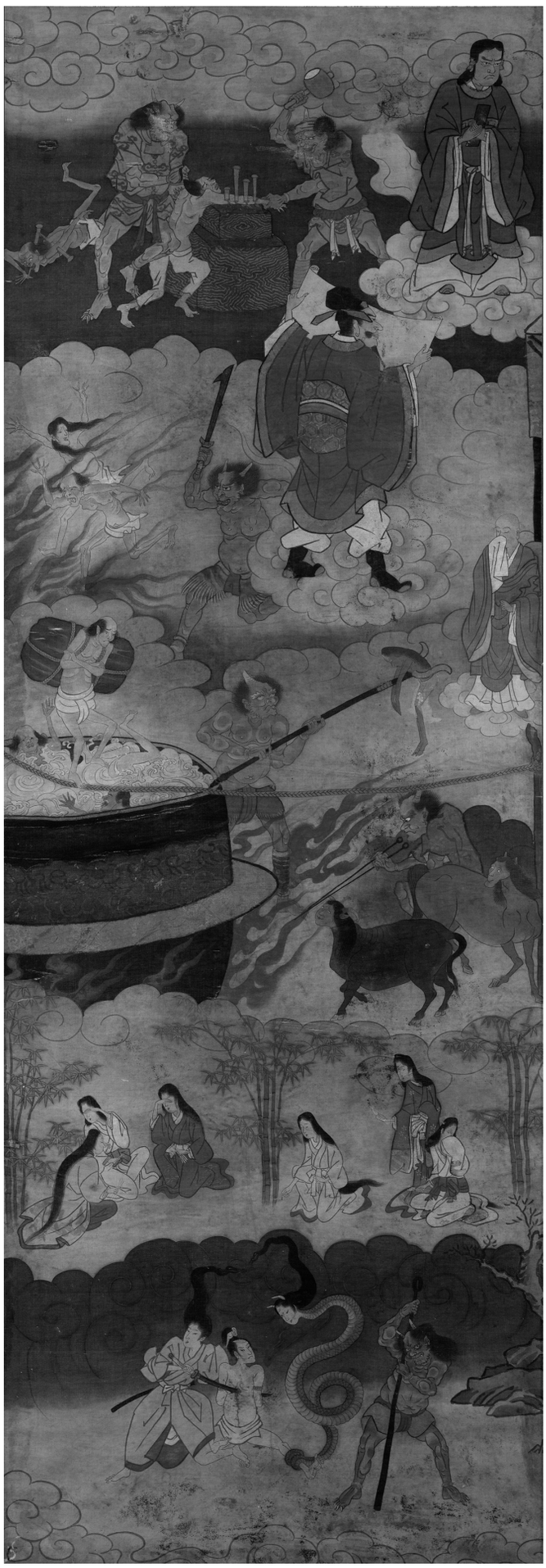
⑧乾闥婆明王（無落款）

左　　中央　　右

⑩地獄図（無落款）



地獄図（中）



地獄図（左）

地獄図（右）